



だて正夢

登米地域の稲作通信 第9号

令和4年1月12日発行
宮城県米づくり推進登米地方本部
宮城県登米農業改良普及センター
Tel: 0220-22-6127



<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/et-tmsgsin-n/>

《概況》作況指数101「平年並」、1等米比率は95.0% (11月30日現在)

1 気象経過

(4月)

最低気温が零度を下回る日がありましたが、平均気温、日照時間は平年を上回りました。

(5月)

平均気温は平年よりも高く推移しました。降水量は、5月初旬、中旬、下旬にそれぞれまとまった降雨がありましたが、平年の81%となりました。

(6月)

平均気温、日照時間は平年を上回りました。降水量は6月4日、29日にまとまった降雨がありました。東北南部の梅雨入りは平年より7日早い6月19日頃でした。

(7月)

中旬から下旬にかけて最高気温が30度を超える日が続きました。日照時間、降水量は概ね平年並でした。梅雨明けは平年より8日早い7月16日頃でした。

(8月)

上旬と下旬の気温は、平年より高くなりましたが、8月11日から17日にかけては平均気温が平年を大きく下回りました。8月9日から17日にかけて断続的な降雨がありましたが、降水量は平年の75%となりました。

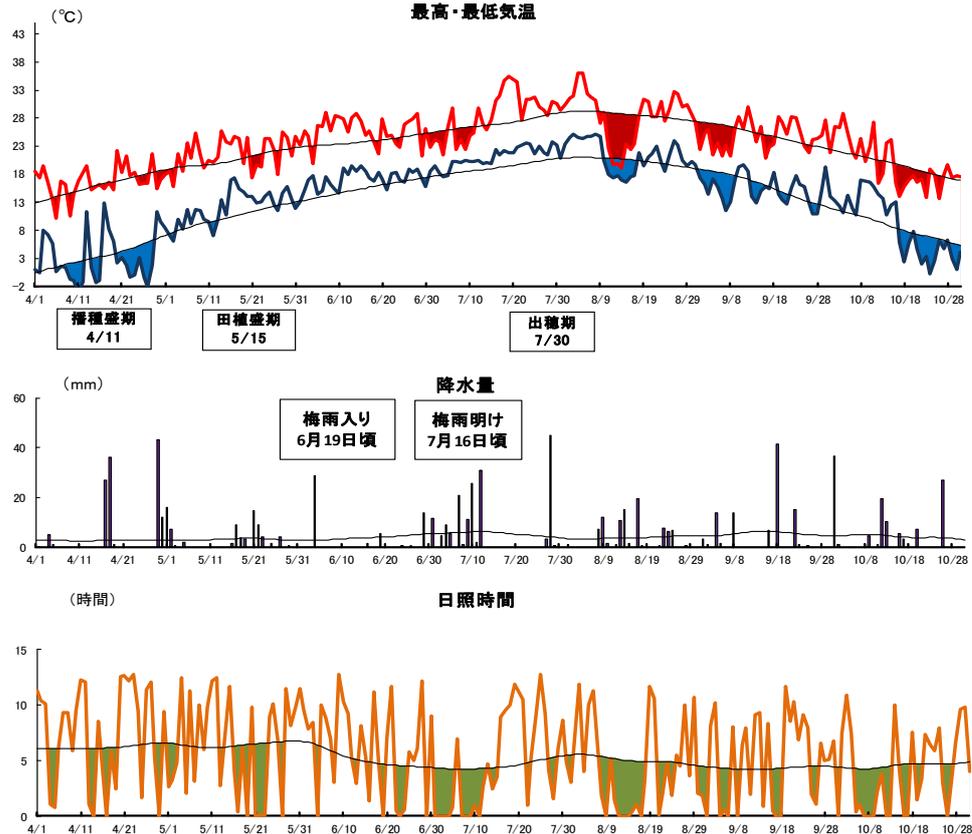
(9月)

上旬から中旬にかけて平均気温が平年を下回る日が続きました。日照時間は平年の116%、降水量は平年の64%でした。

(10月)

平均気温は、上旬は平年を上回りましたが、下旬は平年を下回りました。日照時間、降水量は平年の約90%となりました。

観測地点：米山アメダス



2 気象概況と管内の生育概況

(1) 育苗期

- 管内の播種盛期（50%終了）は4月11日（平年より1日早い）でした。
- 一部でトリコデルマ菌やフザリウム菌による苗立枯病が見られました。

(2) 田植期～活着期

- 管内の田植盛期（50%終了）は5月15日（平年より2日遅い）で、晩期栽培（田植え5月15～25日）が多くなりました。
- 風の強い日が多く、一部で植え痛みも見られましたが、比較的天候に恵まれたため、田植え後の活着は概ね順調に進みました。

(3) 分けつ期～出穂期

- 7月は、上旬は低温寡照により、茎数の増加は緩慢になりました。中～下旬にかけて最高気温が30度を超える日が続き、日照時間も平年より多く葉色は平年より低く推移しました。
- 7月中旬から8月初旬にかけて最高気温が30度を超える日が続き、管内の出穂期（50出穂）は7月30日（平年より2日早い）となりました。

【管内の出穂期】

地帯区分	出穂始期		出穂期		穂揃期	
	令和3年	平年	令和3年	平年	令和3年	平年
北部平坦	7月27日 (-3)	7月30日	7月30日 (-2)	8月1日	8月6日 (-2)	8月7日
三陸沿岸	7月27日 (-6)	8月2日	7月30日 (-5)	8月4日	8月6日 (-11)	8月17日
管内合計	7月27日 (-3)	7月30日	7月30日 (-2)	8月1日	8月6日 (-2)	8月7日

※出穂始期・出穂期・穂揃期は、それぞれほ場の50%以上出穂した面積が5%、50%、95%以上に達した日をさす。

※平年値は、過去5か年(平成28年～令和2年)の平均値。

(4) 登熟・収穫期

- 出穂期後の8月上旬は高温多照で経過しましたが、8月中旬の平均気温は平年より低く、日照時間は平年の60%程度となりました。8月下旬は再び高温となりましたが、9月上旬は低温で推移しました。
- 出穂期は平年より早くなりましたが、管内の刈取盛期（50%終了）は9月28日（平年より4日早い）、刈取終期は平年並の10月15日となりました。

【管内の刈取期間】

地帯区分	刈取始期		刈取盛期		刈取終期	
	令和3年	平年	令和3年	平年	令和3年	平年
北部平坦	9月20日 (-3)	9月23日	9月28日 (-4)	10月2日	10月15日 (±0)	10月15日
三陸沿岸	9月22日 (-5)	9月27日	9月30日 (-7)	10月7日	10月11日 (-4)	10月15日
管内合計	9月20日 (-2)	9月22日	9月28日 (-4)	10月2日	10月15日 (±0)	10月15日

※始期、盛期、終期とは、面積の合計がそれぞれ水稲作付面積の5%、50%、95%以上となった日をさす。

※平年値は、過去5か年(平成28年～令和2年)の平均値。

3 管内の病害虫の発生状況(県病害虫防除所巡回調査結果による)

(1) ばか苗病

- 育苗時の巡回調査の結果、発生地点率は50%でした。(県平均34.1%)
- 7月1~2日, 5~6日の巡回調査では、発生地点率は12.5%, 発病株率は0.01%でした。普及センターの達観では、発病程度の低い発生が見られました。(県平均発生地点率14.3%, 発病株率0.07%)

(2) 紋枯病

- 9月7~10日の巡回調査では、発生地点率は25%, 発病株率は3.0%, 発病度は0.8で「少」でした。(県平均発生地点率32.1%, 発病株率2.9%, 発病度0.9) 平年(県平均発生地点率71%, 発病株率19.3%, 発病度6.3%)より少ない発生でした。

(3) いもち病

1) 葉いもち

- 6月14~18日の補植用残苗巡回調査では、残苗放置筆率は20.0%, 残苗発病筆率は33.3%でした。(県平均残苗放置筆率10.7%, 残苗発病筆率13.3%)
- 8月2日~5日の巡回調査では、発生地点率は12.5%, 発病株率は1.0%, 上位1~2葉病斑数は0.1でした。(県平均発生地点率1.8%, 発病株率0.1%, 上位1~2葉病斑数0.0)

2) 穂いもち

- 9月7~10日の巡回調査では、穂いもちの発生地点率は12.5%, 発病株率は7.5%でした。(県平均発生地点率32.1%, 発病株率2.0%)

(4) イネドロオイムシ

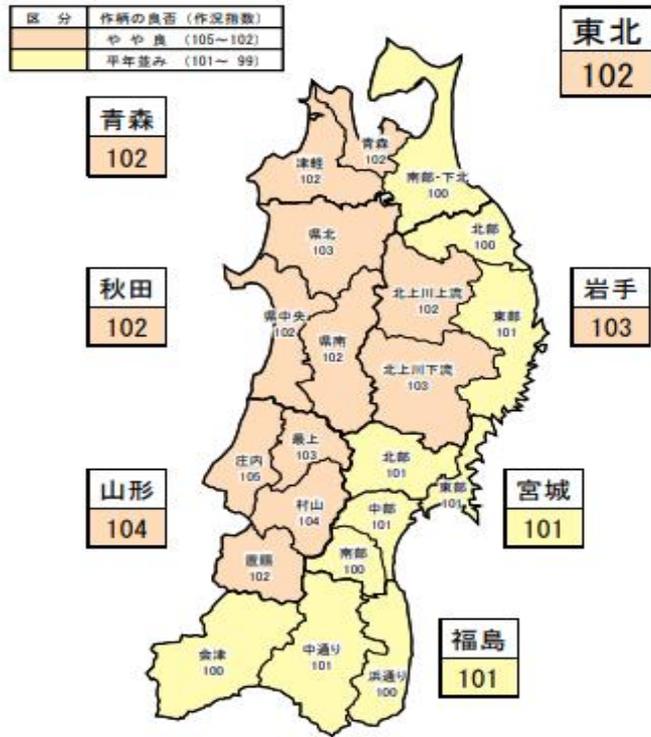
- 6月中旬の巡回調査では、イネドロオイムシの被害度は3.75(県平均0.63), 7月初旬の巡回調査では、9.25(県平均1.70)でした。

(5) 斑点米カメムシ類(アカスジカスミカメ)

- 7月1~2日, 5~6日の巡回調査では、水田周辺(畦畔, 牧草地, 雑種地)におけるカスミカメムシ類(アカスジカスミカメ, アカヒゲホソミドリカスミカメ, フタトゲムギカスミカメ等)のすくい取り虫数は45.4頭でした。(県平均25.5頭)
- 8月2~5日の巡回調査では、水田内におけるカスミカメムシ類のすくい取り虫数は成虫9.4頭でした。(県平均成虫3.5頭)
- 8月17~20日の巡回調査では、水田内におけるカスミカメムシ類のすくい取り虫数は成虫2.3頭, 幼虫1.3頭でした。(県平均成虫1.2頭, 幼虫0.3頭)
- 8月中旬の気温が平年より低く、斑点米カメムシ類の活動が平年より抑制されたことや、水田周辺の草刈りや出穂期以降の薬剤防除により、本田での密度が抑制され、斑点米カメムシ類の被害が平年より少なくなったことが推測されます。

4 令和3年産水稻の作柄概況（宮城県）

図2 県・作柄表示地帯別作況指数



東北農政局 令和3年12月8日公表

【結果】

宮城県の水稲の10a当たり収量は547kgで、作況指数101の平年並となった。

これは、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が平年に比べ「やや多い」となり、登熟（開花、受精から成熟期までのもみの肥大、充実）もおおむね順調に推移したことから、「平年並み」となったことによる。

また、農家等が使用しているふるい目幅（1.90mm）ベースの作況指数は101（平年並）となった。

注：作況指数は、10a当たり平年収量に対する10a当たり収量の比率であり、県ごとに、過去5年平均（平成27年度～令和2年度）に農家等が実際に栽培したふるい目幅の分布において、最も多い使用割合の目幅（岩手県：岩手県、宮城県：1.90mm、福島県は21.90mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

5 調査ほの収量調査結果と収量を左右した要因

（1）移植栽培 収量調査結果

No.	品 種	栽培タイプ	調査地点	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	収量調査(1.9mm以上)						倒伏程度 (%)	
						m ² 当たり穂数(本/m ²)	1穂粒数(粒)	m ² 当粒数(百粒/m ²)	登熟歩合(%)	玄米千粒重(g)	精玄米重(kg/10a)		
1	ひとめぼれ	Cタイプ	南方町	前年比・差	8月1日	9月13日	389	80.6	313	72.8	22.9	522	5
				平年比・差	-4	-2	97%	107%	103%	84%	104%	90%	—
2	ひとめぼれ	Cタイプ	中田町	前年比・差	8月3日	9月14日	444	60.8	270	90.3	22.6	551	0
				平年比・差	-4	-3	96%	92%	88%	97%	107%	101%	103%
3	ひとめぼれ	Cタイプ	登米町	前年比・差	8月1日	9月11日	386	67.9	262	82.3	22.3	481	0
				平年比・差	-4	-4	84%	104%	87%	91%	102%	81%	—
	ひとめぼれ	3ほ場平均	前年比・差			406	69.8	282	81.8	22.6	518		
			平年比・差			92%	101%	93%	91%	104%	88%	—	
4	ササニシキ	Cタイプ (復活ササニシキ)	豊里町	前年比・差	7月29日	9月12日	409	79.0	323	83.5	21.6	583	0
				平年比・差	-7	-5	100%	86%	87%	100%	103%	90%	—
5	だて正夢	—	迫町	前年比・差	8月2日	9月15日	417	86.5	361	78.3	21.5	607	0
				平年比・差	-5	-5	90%	106%	96%	92%	115%	101%	—
6	金のいぶき	—	登米町	前年比・差	8月4日	9月22日	519	77.1	400	61	21.7	532	20
				平年比・差	-4	-7	101%	92%	93%	99%	105%	100%	—

※栽培タイプ

Cタイプ：農業・化学肥料節減栽培（慣行栽培の5割減；農薬8成分，化学窒素成分3.5kg以下）

※平年値は，過去5か年（平成28年～令和2年）の平均値。

※倒伏程度は倒伏角度「0～4」×面積比率。例えば，完全倒伏ならば400（4×100%）。

移植（ひとめぼれ）

○m²当たり穂数 → 少ない ○一穂粒数 → 多い ○m²当たり粒数 → 少ない
 ○登熟歩合 → 平年並 ○玄米千粒重 → 平年並 ○収量 → 少ない

移植（ササニシキ）

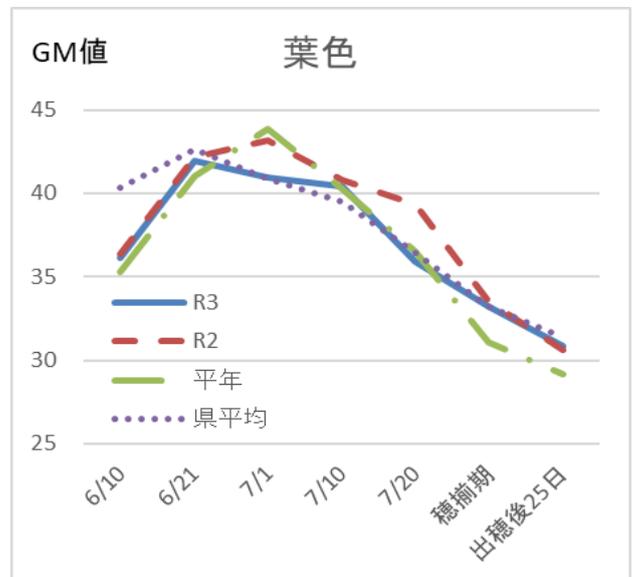
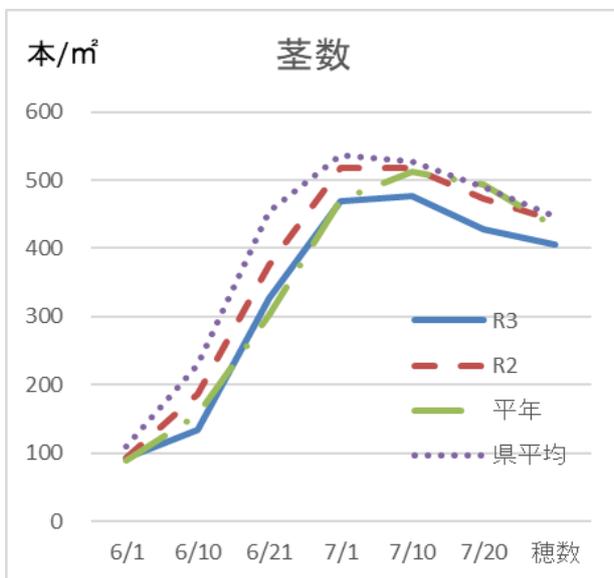
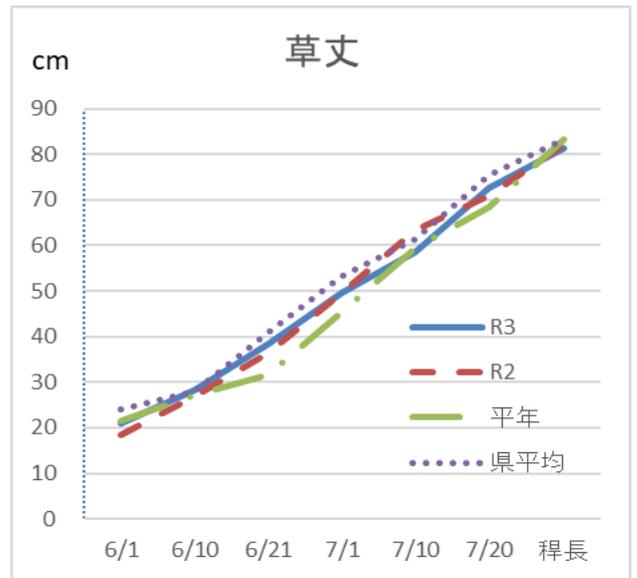
○m²当たり穂数 → 少ない ○一穂粒数 → 多い ○m²当たり粒数 → やや少ない
 ○登熟歩合 → 平年並 ○玄米千粒重 → 平年並 ○収量 → 少ない

移植（だて正夢）

○m²当たり穂数 → 平年並 ○一穂粒数 → 少ない ○m²当たり粒数 → 少ない
 ○登熟歩合 → 平年並 ○玄米千粒重 → 重い ○収量 → 平年並

（移植 ひとめぼれ）

- 茎数は6月下旬まで順調に増加しましたが、7月上旬の低温寡照により増加は緩慢となりました。その後は高温多照で推移しましたが、穂数は平年を下回りました。
- 千粒重は平年並、m²当たり粒数は平年より少なくなりました。登熟歩合は平年並でしたが、篩目 1.9mm 以上の割合が少なくなり、収量は平年より低くなりました。
- 玄米の長さは 5.27mm、幅は 2.73mm、厚みは 2.03mm（前年長さ 5.01mm、幅 2.71mm、厚み 2.01mm）でした。

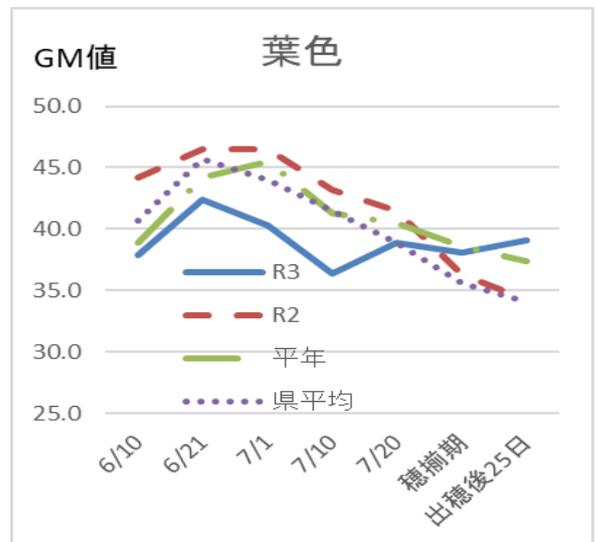
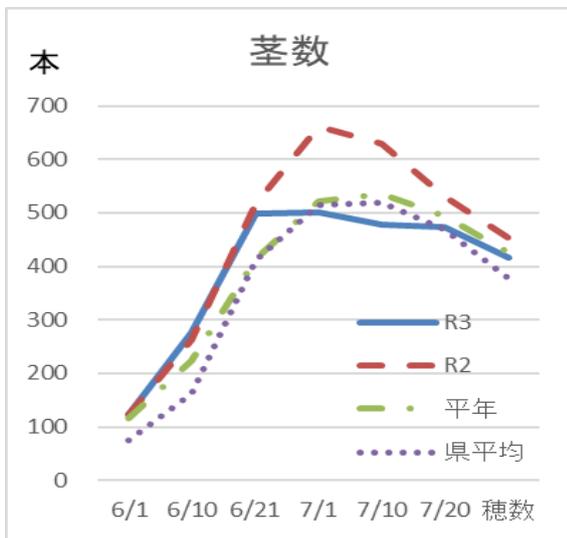
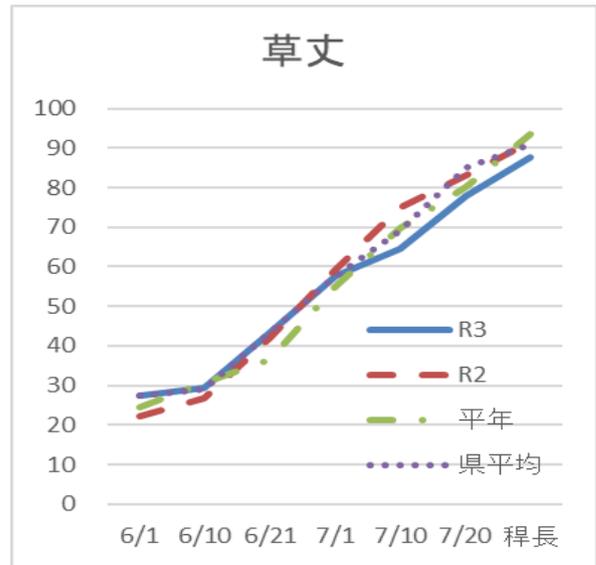


ひとめぼれ3ほ場平均 粒数比(%)

	1.8mm以下	1.9mm以上	粒数比(%)				計
			1.9=<	2=<	2.1=<	2.2=<	
本年	8.7	91.2	11.2	38.2	35.0	6.8	100.0
前年	3.9	96.1	7.8	33.3	34.6	20.3	100.0

(移植 だて正夢)

- 7月上旬の低温寡照により茎数の増加が鈍化しましたが、その後回復し、穂数は平年並となりました。
- 葉色は、6月下旬から平年を下回りましたが、7月14日、20日に追肥を行い、7月中旬以降に葉色が回復し、出穂後25日まで維持しました。
- m²当たり籾数は平年より少なくなりましたが、千粒重は平年より重く、登熟歩合は平年並で、収量は平年並となりました。



だて正夢 粒数比(%)

	1.8mm以下	1.9mm以上					計
			1.9=<	2=<	2.1=<	2.2=<	
本年	10.6	89.4	12	40.4	32.4	4.6	100.0
前年	6.6	93.4	17.1	40.9	27.5	7.9	100.0

<参考> ひとめぼれ収量構成要素目標(移植)	
m ² 当たり穂数	410~460本
1穂籾数	60~70粒
m ² 当たり籾数	28~30千粒
登熟歩合	85~90%
玄米千粒重	22.3g
10a当たり収量	550kg

収量は1.9mm以上の玄米

※「宮城県稲作指導指針基本編(平成31年3月)」から

<参考> ササニシキ収量構成要素目標(移植)	
m ² 当たり穂数	480~510本
1穂籾数	54~64粒
m ² 当たり籾数	28~30千粒
登熟歩合	80~85%
玄米千粒重	21.4g
10a当たり収量	540kg

収量は1.9mm以上の玄米

※「宮城県稲作指導指針基本編(平成31年3月)」から

＜参考＞ だて正夢収量構成要素目標(移植)	
㎡当たり穂数	350～400本
1穂籾数	85～95粒
㎡当たり籾数	30～34千粒
登熟歩合	75～85%
玄米千粒重	21～21.5g
10a当たり収量	540kg

収量は1.9mm以上の玄米
※「宮城県稲作指導指針基本編(平成31年3月)」から

＜参考＞ 金のいぶき収量構成要素目標(移植)	
㎡当たり穂数	440～490本
1穂籾数	64～72粒
㎡当たり籾数	30～33千粒
登熟歩合	70～75%
玄米千粒重	22.5～23.2g
10a当たり収量	510～540kg

収量は1.9mm以上の玄米
※「宮城県稲作指導指針基本編(平成31年3月)」から

(2) 乾田直播栽培 収量調査結果

No.	品 種	栽培 タイプ	調査 地点	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	出穂後25日調査			収量調査(1.9mm以上)					
						稈長 (cm)	穂長 (cm)	葉色 (GM)	㎡当たり 穂数 (本/㎡)	1穂籾数 (粒)	㎡当籾数 (千粒/㎡)	登熟歩合 (%)	玄米千粒 重 (g)	精玄米重 (kg/10a)
1	ひとめぼれ	ブラ耕 グレンドリル 体系	米山町	8月10日	9月21日	81.5	19.3	32.7	416	78.2	325.0	69.7	23.0	521
				前年比・差 -1	-4	97%	101%	-1.1	88%	100%	87%	84%	108%	80%
				平年比・差 ±0	-8	93%	97%	-3.1	86%	106%	92%	95%	100%	87%
2	ササニシキ	ブラ耕 グレンドリル 体系	米山町	8月5日	9月29日	86.5	20.3	38.7	430	122.4	526.0	68.2	21.7	778
3	つきあかり	ブラ耕 グレンドリル 体系	豊里町	8月1日	9月20日	72.7	17.9	36.3	436	71.7	313.0	81.0	24.7	626

※平年値は、NO.1 ひとめぼれは過去5か年(平成28年～令和2年)の平均値。
NO.2～No.3は1年目なので、前年値、平均値なし。

※倒伏程度は倒伏角度「0～4」×面積比率。例えば、完全倒伏ならば400(4×100%)。

乾田直播(ひとめぼれ)

○㎡当たり穂数→ 少ない ○1穂籾数→ 多い ○㎡当たり籾数→ 少ない
○登熟歩合 → 低い ○千粒重 → 高い ○収量 → 少ない

・ひとめぼれは、㎡当たり穂数は平年の86%、㎡当たり籾数は平年の92%、登熟歩合も低くなり、収量は平年を下回りました。

6 1等米比率と品質を左右した要因

(1) 1等米比率

表 1等米比率と落等要因(倉庫検査+カントリーエレベーター, うるち米) (11月30日現在) (単位: %)

JAみやぎ登米											JA南三陸	R3	R2	R1	H30	
支店名		追	とよま	豊里	石越	南方	米山	なかだ	東和	計	津山	登米市	登米市	登米市	登米市	
1等米比率(%)		96.5	95.6	98.4	95.6	95.9	93.1	93.0	93.5	95.1	89.7	95.0	89.0	64.4	92.0	
格下理由	形質	充実度不足	1.6	0.6	0.4	3.7	0.6	3.6	5.8	3.4	2.8	0.9	2.8	2.1	7.2	5.1
		心白・腹白	0.2	0.0	0.4	0.2	1.6	1.7	0.1	0.1	0.7	8.1	0.7	0.4	26.9	1.0
		着色粒	部分着色粒	0.7	2.7	0.4	0.3	1.1	0.6	0.8	2.8	0.8	0.8	8.2	1.1	1.1
		被害粒	胴割粒	0.4	0.8	0.2	0.1	0.8	0.5	0.3	0.1	0.4	1.0	0.4	0.1	0.3
	異種穀粒・もみ混入		0.6	0.3	0.2	0.1	0.1	0.6	0.1	0.1	0.3	0.4	0.6	0.2	0.1	0.4

※1等米比率は倉庫検査+カントリーエレベーター。

※格下理由は倉庫検査の格下数量割合から算出。

※充実度不足: 形質的に扁平、縦溝が深い、果皮が厚い、光沢がない、肌ずれ、薄い茶米、軽い奇形、未熟粒等が1等米より多く認められるが、それ単独では格下げ理由に当てはまらず、総合的に判断して1等米に該当しないもの

※異種穀粒: もみ混入、もち玄米混入(うるち)、精米混入(もち)等

- ・管内の1等米比率は95.0%(11月30日現在)でした。
- ・落等要因は、第1位は充実度不足で、続いて部分着色粒が多くなりました。

(2) 品質を左右した要因 充実度不足の発生

- 充実度不足とは、形質的に粒が扁平、縦溝が深い等成熟していない粒が1等米より多く認められるが、それ単独では格下げ理由に当てはまらず、総合的に判断して1等米に該当しないものをいいます。
- 充実度不足の原因は、8月中旬の低温寡照による登熟の停滞、その後の倒伏や早期落水、紋枯病の発生などによる登熟不良が考えられます。

(参考) 調査ほの品質調査結果

【水稲品質調査結果(移植)】

No.	品 種	栽培タイプ	調査地点		玄米 (1.9mm以上)							
					整粒比 (%)	胴割粒比 (%)	白未熟粒比 (%)	青未熟粒比 (%)	その他未熟粒比 (%)	着色粒比 (%)	死米粒比 (%)	被害粒比 (%)
1	ひとめぼれ	Cタイプ	南方町		68.1	7.8	1.4	3.6	18.4	0	0	0.7
				前年値	85.4	0.0	2.7	0.9	8.1	0.9	0.2	1.9
				前々年値	81.5	0.7	7.8	0.3	7.9	0.2	0.8	0.9
2	ひとめぼれ	Cタイプ	中田町		69.1	3.7	2.1	2.9	21.1	0.1	0.2	0.7
				前年値	80.6	0.0	5.4	0.4	11.1	0.1	0.2	2.1
				前々年値	80.2	2.5	7.8	0.0	7.4	0.0	0.8	1.2
3	ひとめぼれ	Cタイプ	登米町		67.9	11.1	2.5	0.5	17.3	0	0.1	0.6
				前年値	83.8	0.1	4.1	0.3	8.4	0.0	0.1	3.2
				前々年値	79.3	0.7	8.5	0.5	7.7	0.0	1.5	1.9
	ひとめぼれ 3ほ場平均				68.4	7.5	2.0	2.3	18.9	0.0	0.1	0.7
				前年値	83.3	0.0	4.1	0.5	9.2	0.3	0.2	2.4
				前々年値	80.3	1.3	8.0	0.3	7.7	0.1	1.0	1.3
4	ササニシキ	Cタイプ (復活ササニシキ)	豊里町		57.8	22.3	4.4	2.7	11.9	0	0.8	0.6
				前年値	77.6	0.5	7.1	1.0	12.2	0.0	1.0	0.6
				前々年値	76.0	1.0	12.8	0.9	5.3	0.0	2.3	1.3
5	だて正夢	-	迫町		66.3	1.9	2.2	2.3	24.7	0	0.1	2.5
				前年値	72.8	0.0	-	0.2	13.0	0.1	0.0	16.3
				前々年値	79.6	0.0	-	0.5	14.1	0.0	0.3	5.4

※SATAKE社RQ1-100Bで測定

※栽培タイプ Cタイプ：農業・化学肥料節減栽培（慣行栽培の5割減；農薬8成分，化学窒素成分3.5kg以下）

※千粒調査

※白未熟粒は、乳白粒、基部未熟粒、腹白未熟粒の合計

※金のいぶきは、巨大胚および低アミロース品種であるため、品質判定機による品質評価ができないためデータなし

【水稲品質調査結果(乾田直播)】

No.	品 種	栽培タイプ	調査地点		玄米 (1.9mm以上)								
					整粒比 (%)	胴割粒比 (%)	白未熟粒比 (%)	青未熟粒比 (%)	その他未熟粒比 (%)	着色粒比 (%)	死米粒比 (%)	被害粒比 (%)	
1	ひとめぼれ	ブヲ耕 グレンドリル体 系	米山町		63.3	0.3	0.3	11.4	23.9	0	0	1.1	
				前年値	80.6	0.0	6.9	1.6	10.4	0.0	0.1	0.4	
				前々年値	79.1	0.1	3.4	1.8	14.7	0.0	0.3	0.5	
2	ササニシキ	ブヲ耕 グレンドリル体 系	米山町		76.0	0.2	4.4	3.8	16.9	0.0	0.3	0.1	
				前年値									
				前々年値									
3	つきあかり	ブヲ耕 グレンドリル体 系	豊里町		62.8	0.0	10.0	3.2	20.9	0.1	1.5	1.4	
				前年値									
				前々年値									

※SATAKE社RQ1-100Bで測定

※千粒調査

※白未熟粒は、乳白粒、基部未熟粒、腹白未熟粒の合計

7 令和4年産に向けての対策

(1)土づくりと適正施肥

堆肥や土づくり肥料（ようりんやケイカル等）を施用し、地力を高め、稲体や根の活力を高めましょう。生育状況に合った施肥を行い、穂揃期まで葉色を維持しましょう。

(2)苗期間の低温回避

3月下旬～4月上旬は低温に遭遇する危険性が高く、無加温育苗の場合、出芽不良につながります。出芽を揃えるためには、4月中旬以降に播種し、育苗期間の温度を確保しましょう。

(3)晩期栽培等による品質向上及びリスク分散

ひとめぼれ・ササニシキ等の晩期栽培（田植え5月15～25日）や直播栽培により出穂期を8月中旬にし、高温登熟および障害不稔の回避を図りましょう。また、幼穂形成期の低温回避は、籾殻が小さくなることを避け、割れ籾発生を抑制する効果があります。

(4)適正な肥培管理・水管理の徹底

安定した品質を確保できるよう適正籾数（ひとめぼれで2.8～3万粒/m²）を目標に、ほ場にあった施肥や栽植密度、植付本数を設定しましょう。

近年中干しの開始時期が遅くなっている傾向があります。有効茎数を確保したら、速やかに中干しを行い、根の活力を高めましょう。

(5)病害虫の防除対策は予防が一番の対策です!!

1)ばか苗病

温湯消毒後の種籾の再汚染を防止しましょう。種籾の保管場所や状況、催芽・出芽時の温度管理を再確認しましょう。生物農薬による種子消毒も効果的です。

2)紋枯病

年々ほ場内の菌核の密度は高まっています。必要があればJA等に相談し、本田での防除を行いましょ。減収率5%を許容水準とすると、要防除水準は、穂ばらみ期の発病株率が中生品種で15%程度、晩生品種で20%程度です。

3)いもち病

箱施用剤の施用量を順守し、予防防除に努めましょう。あわせて、ほ場をよく観察し、必要があればJA等に相談し、本田での防除を行いましょ。

4)斑点米カメムシ類

地域一斉の草刈りや広域一斉防除は斑点米カメムシ類の防除に効果的です。

また、ほ場内にヒエやイヌホタルイなどの雑草があると、斑点米カメムシ類をほ場に呼び寄せてしまいます。除草は確実に行いましょ。令和3年度に残草が多かったほ場では一般米栽培に戻し体系防除による除草を行うことも検討しましょ。

アカスジカスミカメの密度低下の一つの方法として、越冬世代の餌となるイネ科植物がある場所を春に草刈り、除草剤散布、畦塗りすることも有効と考えられます。

(6)適期収穫

「ひとめぼれ」「ササニシキ」の収穫期の目安は出穂後の積算平均気温1,000℃となった頃です。積算平均気温とあわせて、籾の熟色、籾水分等から総合的に判断し、適期刈取りに努めましょう。